

天文学の基礎知識

一、三国志の時代の特異性

以前、『漢魏律考』の中で法が晋までに体系化されていく様子を紹介しましたが、天文学も晋までに大まかな基礎ができあがっていきました。このことは『史記』天官書や『漢書』天文志などと『晋書』天文志の記述量の違いからも一目瞭然です。例えば『漢書』に登場する星座の数が百十八であったのが、司馬炎が星座を整理させたときには二百八十三にまで膨れ上がっています。また、次章で紹介する宇宙の形などもこの時代を通して論争に明け暮れた結果、渾天説が非常に強力なものになってしまおうと、その後はなかなか進歩がありません。

これだけ急速に発達した背景には緯書の流行があったのではないのでしょうか？

緯書というのは簡単にいってしまえば予言書のたぐいで、河図や洛書といった有名なものからよくわからないうものまでさまざまなものが書かれました。当時の星占いをまとめた『開元占経』にも五十以上の緯書が登場します。これらは前漢の董仲舒が唱えた天文現象は地上の現象と関連しているという思想を背景に爆発的に流行し、後漢末から晋にかけて大流行しました。董仲舒は法律でも長く受け継がれていく理論を提唱しており、多才な人物であったようです。

その後、隋の煬帝によって徹底的に禁じられてからは二度と流行することがありませんでした。つまり、三国志の時代は一種のオカルトブームに沸いた特異な時代だったのです。